コロナ禍における高齢者施設の老年看護学実習

秋定真有[1]，石橋信江[1]，西村康子[2]，坪井桂子[1]
[1]神戸市看護大学，[2]前神戸市看護大学

キーワード：老年看護学実習，特別養護老人ホーム，介護老人保健施設，看護大学，看護学生

Report of Gerontological Nursing Practice at Elderly Care Facilities Through the Covid-19 Pandemic

Mayu Akisada[1], Nobue Ishibashi[1], Yasuko Nishimura[2], Keiko Tsuboi[1]
[1]Kobe City College of Nursing, [2]Former Kobe City College of Nursing

Key Words: Gerontological Nursing Practice , Nursing Home, Long-Term Care Health Facilities, College of Nursing, Nursing Student

要　旨

新型コロナウイルス感染症流行の影響を受け、高齢者施設での従来の臨地実習は困難となり、2020 年度以降、感染拡大の防止と教育の質を担保した実習方法について、様々な観点から検討を重ねてきた。本稿においては、長期化する COVID-19 の感染流行のなかで実施した 2021 年度後期の老年看護学実習の内容と今後の課題について報告することを目的とする。この報告が、社会のいかなる状況においても教育の質の担保を保証する実習を展開するために貢献する資料となりうると考える。

2021 年度後期の老年看護学実習は、感染拡大と実習施設内の状況に応じて、適宜、実習施設と相談・調整しながら、その時期に可能な方法で実習を展開することとしたため、複数の実習プログラムを展開することとなった。各プログラムの内容の柱としては、視聴覚教材の視聴、実習施設の協力を得て実施する入居者を受け持つ実習や見学実習、看護過程の展開とした。実習の結果、学生は、COVID-19 の感染流行下において、直前に実習スケジュールの変更などが生じるなかでも、2 週間の実習で現在の自己の課題にどのように取り組むかを明確にし、実習に臨むことができていた。また、今期に展開した複数の実習方法を組み合わせた実習プログラムには、学生にとってよい教育効果があったことが教員と実習指導者による実習評価から推察され、学生からは臨地実習期間は短縮されたなかでも、高齢者施設で暮らす高齢者の体験や思いの理解が深まり、必要とされる具体的な看護の検討と実践に役立ったとの実習後の評価が得られた。

COVID-19 の感染拡大の収束には、今後も時間を要することが予測される。今後、どのような実習方法で実習を展開する際も、学生と施設に入居する高齢者の双方にとってよい効果を得られる実習方法を検討し続ける必要がある。

Ⅰ．はじめに

2019 年 12 月頃より確認され始めた新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）は、世界的な猛威を振るい、2022 年 1 月現在においても深刻な状況が続いている。こうした「コロナ禍」と称される深刻な状況のなかで、人々の社会生活における様々な場面において、それまで当たり前に実施できていたことが制限されるようになった。看護学教育の場においては、全国の教育機関において病院・施設での実習の受入れ中止が相次ぎ、臨地実習が実施できない事態が生じた。このような事態に対し、文部科学省・厚生労働省は、2020 年 2 月に「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」（文部科学省・厚生労働省，2020）を発出し、学校養成所における実習等の授業の弾力的な取り扱いについて周知した。この発出では、「実習施設の変更を検討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行っても差し支えないこと、また、これらの方法によってなお実習に代えて演習または学内実習等を実施することにより、必要な知識および技能を修得することとして差し支えない」としている。このことにより、学士課程において修得すべき看護実践能力の質的水準をいかに保証するかが各大学の課題となった。

本学の老年看護学実習では、介護老人保健施設もしくは特別養護老人ホームのいずれかの施設において、2 週間、施設に入居する高齢者を受け持ち、看護展開することを従来の実習方法として実施してきた。しかしながら、コロナ禍において、高齢者施設で従来実施してきた臨地実習は困難となり、2020 年度以降、教育の質を保証した実習方法について、COVID-19 の感染拡大の防止の観点から、実習施設と検討を重ねたうえで実施してきた。

そこで本稿においては、長期化するCOVID-19の感染拡大のなかで実施した2021年度後期の老年看護学実習の実習プログラムの内容と方法について報告することを目的とする。本報告は、社会がいかなる状況であっても、教育の質を保証する看護学実習を展開するための基礎的資料になりうると考える。

本報告は、本実習の成績の確定後に行うものである。また、実習を履修した学生および実習協力を得た実習施設と施設職員、施設に入居する高齢者などの個人が特定されないように匿名性を保つように努めた。

Ⅱ．老年看護学実習の概要

1．老年看護学実習の目的と従来の実習方法

本科目は、3年次後期～4年次前期に開講される2単位の実習で、生活の場が移行し、療養が必要となった高齢者を包括的に理解し、その個人と家族に必要な看護を実践する能力を修得することを目的としている。実習目標は、表1に示すように、1～5の目標を設定し、尊厳や権利が脅かされやすい高齢者の特徴を踏まえ、人生の最終段階を生きる高齢者の価値観や意思を尊重した看護について考え実践すること、高齢者の生活機能に着目しもてる力に働きかけるなど、目標志向型思考を取り入れて看護過程の展開を実施することとしている。また、高齢者が人生の最期まで望む生活を送れるように生活環境を整え、多職種との連携・協働についても考察することとしている。

表1．本学の老年看護学実習の実習目的・実習目標

Ⅰ．実習目的
本科目は、生活の場が移行し、療養が必要となった高齢者を包括的に理解し、その個人と家族に必要な看護を実践する能力を修得する
Ⅱ．実習目標
1．看護職者として倫理的に判断・行動するための基本的能力を修得する
2．高齢者ケア施設において疾病や障害をもちながら療養生活を送る対象者を包括的に理解し、対象者とその家族に必要な支援をアセスメントする能力を修得する
3．療養生活を送る対象者と家族の価値観や意思決定を尊重し、人生の統合を支える看護を実践する
4．対象者の支援にかかわる他職種との連携・協働の実際、継続看護の視点を学び、そのあり方と看護の役割を理解し、今後の課題について考察する
5．療養生活を送る対象者と援助関係を築くとともに、援助者としての自己の課題を明確にする

従来の実習方法では、学生1人が、介護老人保健施設もしくは特別養護老人ホームのいずれかの施設において、2週間を1クールとし、施設に入居する高齢者を受け持ち看護展開する。加えて、受け持ち高齢者についての看護の方向性を検討するカンファレンス、学生が臨床の場で気づいた倫理的課題について、その解決策を検討する倫理カンファレンスなどを、実習指導者をはじめとした臨地の看護職や介護職に参加してもらい実施している。

2．コロナ禍1年目の老年看護学実習

高齢者はCOVID-19に感染した際に重篤化しやすい傾向があることを踏まえ、実習施設と協議した結果、2020年度前期以降の老年看護学実習は、原則臨地で高齢者を受け持つ実習は中止し、学内実習とオンライン実習を併用した方法を中心に展開してきた。学内実習日とオンライン実習日の日数については、その時期の感染拡大状況を踏まえた大学の方針に従い設定した。実習内容としては、高齢者施設の特徴や施設に入居する高齢者や認知症当事者と家族の思いや生活の理解を深めるための複数の視聴覚教材の視聴、紙上事例を用いた看護過程の展開、紙上事例の倫理的課題について倫理に適った実践を検討する倫理カンファレンス、悩みの解決や学びを深めるための日々のカンファレンスなどであった。なお、本報告では、オンライン実習を、学生が自宅からオンラインシステムを用いて参加する同時双方型の実習とした。また、学内実習とは、学生が学内で、視聴覚教材や看護過程の展開に関する個人ワークおよびグループワークやカンファレンスを行うもので、複数の学生と教員が対面で学びを深める同時双方型の実習と操作的に定義した。

COVID-19の感染拡大以降、紙上事例における看護過程の展開をする実習が中心となったが、そのような実習においても、学生は、療養を必要とする高齢者への看護を考察することができていた。また、看護過程において各自が取り組んだことをカンファレンスで共有しディスカッションすることを通して、学生は看護の視野を広げるとともに、自分の傾向を捉え今後に向けた自己の課題を見出すことができていた。

Ⅲ．長期化するコロナ禍における 2021 年度後期の老年看護学実習の取り組み

1．長期化するコロナ禍における老年看護学実習の課題

2021 年度後期の老年看護学実習が開講となった時期は、10 月 1 日に全国的に緊急事態宣言や蔓延防止措置が解除され、感染拡大状況は比較的沈静化していた時期であった。しかしながら、高齢者施設では行政からの通達のもと面会制限は解除されずオンライン面会を継続している施設が多く、家族の面会もできない中で学生が臨地に入り高齢者を受け持つ実習は困難な状況にあった。COVID-19 の第 1 波到来以降、長期にわたり紙上事例を用いて看護過程の展開をする実習をしてきたが、教育上の効果は得られていると評価してきた（坪井 , 2020）。その一方で、学生が施設に入居する高齢者への援助方法を試行錯誤しながら、より具体的に検討するためには、施設に入居する高齢者の生活上の思いや望みを実際に当事者の姿や声に触れながら捉えることや学生自らが高齢者にかかわることを通して高齢者の反応や手ごたえを知ることが課題だと考えてきた。加えて、2021 年度後期に老年看護学実習を履修する 3 年次生は、臨床で看護を必要とする対象者と直接的にかかわり、看護を実践する機会をほとんど経験できていないことから、臨床で看護を学ぶ機会を拡充していく必要があった。

そこで、この課題について実習施設と協議した結果、COVID-19 感染拡大の収束がみえないなかで教育の質を保証していくためには、高齢者の安全を第一に考えつつも、

表2. 2021 年度老年看護学実習の実習形態と各実習施設に協力を得た主な内容

	実習形態	各実習施設に協力を得た内容		
		実習施設 A	実習施設 B	実習施設 C
1 クール目 グループ①	臨地実習＋学内実習＋オンライン実習	・見学実習半日 ・倫理カンファレンス参加		・施設に既存する施設紹介 DVD
1 クール目 グループ②	臨地実習＋学内実習＋オンライン実習	・見学実習半日	・施設動画撮影・編集協力 ・倫理カンファレンス参加	
2 クール目 グループ①	臨地実習＋学内実習＋オンライン実習	・見学実習半日 ・倫理カンファレンス参加		
2 クール目 グループ②	臨地実習＋学内実習＋オンライン実習	・見学実習半日	・オンラインによる入居者と学生のかかわり 2 回 ・倫理カンファレンス参加	
3 クール目 グループ①	臨地実習＋学内実習＋オンライン実習	・見学実習半日		・施設に既存する施設紹介 DVD ・受け持ち実習 1 日
3 クール目 グループ②	臨地実習＋学内実習＋オンライン実習		・倫理カンファレンス参加	・施設に既存する施設紹介 DVD ・受け持ち実習 1 日
4 クール目 グループ①	臨地実習＋学内実習＋オンライン実習	・受け持ち実習 2 日		
4 クール目 グループ②	臨地実習＋学内実習＋オンライン実習		・倫理カンファレンス参加	・施設に既存する施設紹介 DVD ・受け持ち実習 5 日間
5 クール目 グループ①	臨地実習＋学内実習	・見学実習半日 ・倫理カンファレンス参加		
5 クール目 グループ②	臨地実習＋学内実習			・施設に既存する施設紹介 DVD ・受け持ち実習 5 日間
6 クール目 グループ①	学内実習＋オンライン実習	・オンラインによる施設オリエンテーション、講話 ・倫理カンファレンス参加		
6 クール目 グループ②	学内実習＋オンライン実習			・施設に既存する施設紹介 DVD ・倫理カンファレンス参加

学生が臨地で学ぶ機会を確保することが必要であると互いに確認した。そこで、COVID-19 の感染流行下であっても、最大限の感染防止策を講じながら、学生が臨地に入る時間や期間を短縮した形での施設見学や、高齢者を学生が受け持ち看護を実践すること、感染拡大の状況や施設内の状況に応じてオンライン上での看護職の実践の見学や学生が高齢者とかかわること等を実習に組み込むことが必要との認識を大学側と実習施設側とで共有した。

２．実習内容と方法

コロナ禍における老年看護学実習の課題を踏まえ、2021 年度後期の老年看護学実習は、感染拡大と実習施設内の状況に応じて、これまで以上に、実習施設と相談・調整しながら、その時期に可能な方法で実習を展開することとした。従来は 1 施設で 1 グループが臨地実習をしていた。しかし、コロナ禍においては実習施設毎に、各時期によって実習受入れの体制や状況も異なることから、その時期に協力可能な実習施設に協力可能な範囲で協力を得る方法をとり、1 グループの実習において、複数の実習施設の協力を得る実習プログラムを設定した。複数の施設から協力を得ることとしたのは、実習時期に合わせて各実習施設で協力可能な実習内容を部分的に組み合わせて、1 グループの実習プログラムを作成することで、学生が高齢者とかかわる時間が少しでももてるように確保したいと考えたためである。そのため、各時期の状況に応じて、異なる複数の実習プログラムを設定し、実習展開することとなった。開講された全 6 クールにおける実習形態と各実習施設に協力を得た主な内容を表 2 に示す。なお、1 クールにつき 2 グループの実習が展開され、1 グループの学生人数は 5 ～ 6 名である。2021 年度後期の老年看護学実習で展開した実習プログラムは、大きくは 3 パターンに大別され、臨地実習日数などの違いを含めると全 12 パターンで構成された。本報告においては、その内の大別される 3 パターンについて述べる（表 3）。

それぞれのプログラムの内容の柱は、視聴覚教材の視聴、実習施設の協力を得て高齢者を受け持つ実習や見学実習、看護過程の展開である。これらの柱の具体的な内容は、各時期において実施可能なもの、実習目標を達成に向けた必要性や、順序性などを踏まえ検討した。また、臨地実習が困難であっても、学生が臨地の看護職の実践をより身近に感じ、自らの看護計画に活かせるようにオンラインで実習指導者とかかわる機会やオンラインによる実習指導者の講話、意見交換の場などを取り入れられるように調整を行った。老年看護学実習における倫理カンファレンスは、尊厳や権利を脅かされやすい高齢者の看護実践を考えるうえで重要なものとなっている。従来の実習であれば、学生が臨地実習で倫理的な側面から疑問を感じた場面について取り上げ、実習指導者をはじめとした看護職や介護職の参加のもと、倫理に適った対応方法をグループで討論している。しかしながら、2021 年度後期は臨地実習ができたとしても、日数や時間が短縮されたことから、臨地実習日に倫理カンファレンスまで設けることは困難だと考えた。また、感染流行下の実習施設の逼迫した状況を踏まえ、オンラインで実習指導者に倫理カンファレンスに参加してもらう場合において、学生への助言のための情報収集や多職種との調整に要する負担から、倫理カンファレンスの事例は紙上のものを使用することとした。

また、これらのプログラムでは、従来の臨地実習とは異なり、学内実習日やオンライン実習日など自己学習の時間がより多く生じる。自己学習の時間を学生自らが計画性をもって有効に活用できるように、自己学習の時間の使い方については、看護過程の展開のための記録の整理の他、授業の復習や文献検索ツールを活用した学習を行うように指導した。

1）パターン 1：臨地実習日数を短縮し高齢者を受け持つ実習を中心とした実習プログラム

COVID-19 の感染拡大の状況が落ち着いている時期には、受け入れ可能な実習施設にて、臨地実習日数を短縮して高齢者を受け持つ実習を実施した。高齢者を受け持つ実習は実習施設 C、倫理カンファレンスは、実習施設 B の協力を得てオンラインで実施した。学生が高齢者を受け持つことについては、実習の各時期に実習施設と高齢者の安全を第一に考えたうえで、受け入れ可能な条件を確認しながら綿密に調整した。この受け持ち実習は臨地実習日が短縮されていることから、必然的に受け持ち高齢者とかかわる時間は減少する。そこで、学生が受け持ち高齢者との援助関係構築や看護過程の展開をスムーズに進められるようにするために、学内日には、施設の特性や施設に入居する高齢者の特徴の理解を深められるように視聴覚教材を活用した。また、2 週間の従来の臨地実習においても、生活の場における看護職の役割や多職種連携に

表3. 2021 年度後期老年看護学実習で展開した実習プログラムの内容

	実習日数		1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
パターン1：臨地実習日数を短縮した高齢者を受け持つ実習を中心とした実習プログラム	実習形態		学内実習	臨地実習	臨地実習	臨地実習	学内実習	臨地実習	臨地実習	オンライン実習	学内実習	学内実習
	主な実習内容	視聴覚教材視聴	・高齢者施設の高齢者の暮らしに関する教材				・認知症ケアに関する映像			・高齢者の終末期に関する映像	・コロナ禍における高齢者施設の実践に関する映像	面談日 最終レポート作成
		実習施設に協力を得た内容	・実習施設C施設既存の紹介DVD	実習施設C 高齢者の受け持ち実習 ・オリエンテーション、施設見学 ・高齢者とのかかわり ・看護職のケア見学				実習施設C 高齢者の受け持ち実習 ・高齢者とのかかわり、 ・ケア実践		実習施設B 実習指導者参加による倫理カンファレンス		
		看護過程（受け持ち高齢者）の展開	・事例の情報収集と整理（紙上と映像の情報から）	・事例の情報整理、アセスメント	・事例のアセスメント、看護上の課題と目標抽出	・中間カンファレンス（アセスメント、看護の方向性について）	・アセスメントの内容や看護目標の修正、面談 ・看護計画の立案	・アセスメントの内容や看護目標の修正 ・看護計画の加筆と修正	・看護計画の加筆と修正	・アセスメントの加筆と修正 ・看護計画の加筆と修正	・看護計画の最終評価 ・最終カンファレンス（目標の達成状況の確認）	
パターン2：実習施設の見学を中心とした実習プログラム	実習形態		学内実習	オンライン実習	オンライン実習	学内実習	臨地実習（見学）	オンライン実習	オンライン実習	オンライン実習	学内実習	学内実習
	主な実習内容	視聴覚教材視聴	・高齢者施設の高齢者の暮らしに関する教材	・高齢者施設における看護職の役割の教材	・高齢者の生活史に関する映像			・認知症ケアに関する映像	・コロナ禍における高齢者施設の実践に関する映像	・認知症の人の家族に関する映像		面談日 最終レポート作成
		実習施設に協力を得た内容			※施設資料に基づいた教員による施設オリエンテーション		施設A 見学実習 ・施設見学 ・高齢者とのコミュニケーション		実習施設B 実習指導者参加による倫理カンファレンス			
		看護過程（紙上事例）の展開	・事例の情報収集と整理（紙上と映像の情報から）	・事例の情報整理、アセスメント	・事例のアセスメント、看護上の課題と目標抽出	・中間カンファレンス（アセスメント、看護の方向性について	・アセスメントの内容や看護目標の修正、面談 ・看護計画の立案	・アセスメントの内容や看護目標の修正 ・看護計画の加筆と修正	・看護計画の加筆と修正	・アセスメントの加筆と修正 ・看護計画の加筆と修正	・看護計画の最終評価 ・最終カンファレンス（目標の達成状況の確認）	
パターン3：オンライン上で学生と入居高齢者がかかわる機会を設けた実習	実習形態		学内実習	オンライン実習	オンライン実習	学内実習	オンライン実習	臨地実習（見学）	オンライン実習	オンライン実習	学内実習	学内実習
	主な実習内容	視聴覚教材視聴	・高齢者施設の高齢者の暮らしに関する教材			・高齢者施設における看護職の役割の教材	・高齢者の終末期に関する映像			・コロナ禍における高齢者施設の実践に関する映像		面談日 最終レポート作成
		実習施設に協力を得た内容	実習施設B 看護職のシャドーイング映像の視聴 グループワーク：翌日の高齢者とのかかわりに向けた計画立案	実習施設Bの高齢者とのオンラインによるかかわり1回目 実習施設B実習指導者からの助言、ワークシート	グループワーク：昨日の施設高齢者とのかかわりの振り返り、次回の計画調整			実習施設Aの高齢者とのオンラインによるかかわり2回目、ワークシート 半日見学実習（施設見学のみ）	実習施設Bの高齢者とのオンラインによるかかわり2回目、ワークシート	グループワーク：2回のかかわりを踏まえた学びのまとめ		
		看護過程（紙上事例）の展開	・事例の情報収集と整理（紙上と映像の情報から）	・事例の情報整理、アセスメント	・事例のアセスメント、看護上の課題と目標抽出	・中間カンファレンス（アセスメント、看護の方向性について）	・アセスメントの内容や看護目標の修正、面談 ・看護計画の立案	・アセスメントの内容や看護目標の修正 ・看護計画の加筆と修正	・看護計画の加筆と修正	・アセスメントの加筆と修正 ・看護計画の加筆と修正	・看護計画の最終評価 ・最終カンファレンス（目標の達成状況の確認）	

おける看護の課題を考察することが難しい学生もいる。そのため、生活の場である高齢者施設における看護職の役割に関する視聴覚教材の活用も加え、施設の看護職のシャドウイング、実習中盤に高齢者施設の看護職の役割に関するカンファレンスを設定し、実習スケジュールに組み込むことを必須とした。

2）パターン 2：実習施設の見学実習を中心とした実習プログラム

臨地で高齢者を受け持つ実習が困難な場合では、短時間の見学実習を中心にしながらも、学生と高齢者が十分な距離をとりながらコミュニケ―ションをとることができるようにした。見学実習は実習施設 A、オンラインによる倫理カンファレンスの実習指導者の参加は実習施設 B の協力を得て実施した。

これまでも、学生が高齢者施設の特徴を捉えられるように、実習プログラムに視聴覚教材の活用を取り入れてきた。しかしながら、学生が施設の看護職の役割を考察するためには、施設に入居する高齢者の生活の様子や生活を支えるうえで、看護職や多職種がどのように考えケアを提供しているのか、その実践のプロセスをより具体的に知ることが必要だと考えた。そこで、見学実習時のオリエンテーションや施設見学のなかで、実習指導者より、日常の看護実践において大切にしている考えや工夫を話してもらうようにした。また、学生が見学実習のなかで、看護職や他職種のケア提供場面とその時の高齢者の反応、また施設での生活に関する高齢者の思いを見聞きできるように調整した。学生が、このように実習指導者の考えとケアの実際、高齢者の反応を踏まえ、高齢者施設における看護職の役割を考察し、紙上事例における看護過程の展開に活かせるように教員は指導を行った。

3）パターン 3：オンライン上で学生と施設に入居する高齢者がかかわる機会を設けた実習プログラム

臨地実習で高齢者とかかわることが困難な状況においても、学生が施設に入居する高齢者とかかわる機会をもてるようにし、施設側と高齢者の協力が得られた場合に、オンライン上で学生と高齢者がかかわる実習プログラムを展開した。このプログラムは、2 つの実習施設の協力を得て実施した。実習施設 A には、半日の見学実習（高齢者とのかかわりはもたない、施設見学のみ）、実習施設 B には、看護職の実践の動画撮影、実習指導者のオンラインによるカンファレンス参加、学生がオンライン上で高齢者とかかわる機会をもつことに協力を得た。なお、このプログラムでは、学生は臨地実習で高齢者を受け持つことができなかったため、看護過程の展開は、紙上事例を用いて実施した。

このプログラムでは、施設に入居する 90 代の高齢者 1 名と学生 6 名が、1 回 1 時間～ 1 時間 30 分を継続して 2 回かかわることができるように設定した。このオンライン上での高齢者とかかわりの目的は、高齢者の現在の生活に対する思いや今後の希望、高齢者の価値観の理解を深めることである。この目標達成のために、学生はどのように高齢者とかかわることが必要か、高齢者の理解を深めるためにはどのような視点や考え方が重要となるのかをかかわりの前後で検討できるように、ワークシートの提示やグループワークの場を設けた。そして、オンライン上のかかわりを通して学んだことを、紙上事例における看護過程の展開に活かせるように教員個別に助言し、より具体的な看護援助を考えられるようにした。

3．学生の実習に対する取り組みと実習目標の達成状況

COVID-19 の感染拡大下において、実習直前に実習スケジュールの変更などが生じるなかでも、学生は 2 週間の実習で、現在の自己の課題にどのように取り組むかを明確にし、実習に臨むことができていた。以下に、学生の実習状況と実習目標の達成状況について、本実習のまとめとして行った 3 つの実習施設との協議会での内容を踏まえ、実習目標毎に述べる。

1）看護職者として倫理的に判断・行動するための基本的能力を修得する

従来の実習から、この目標の達成に向けては、倫理カンファレンスが大きな要となってきた。2021 年度後期の倫理カンファレンスは、全クールを通して紙上事例を用いて行い、実習指導者のオンラインによる参加の協力を得て実施した。提示された事例について、個々の学生各自が倫理カンファレンスまでにワークシートに沿って倫理に適った対応方法を検討したうえで、グループで検討するカンファレンスの方法をとった。紙上の同じ事例について、まずは学生が自分の思考を整理したうえでグループでの検討に参加することにより、倫理的課題の解決に向けた多角的なアプロー

チを自分の思考の傾向と向きあいながら考えることができていた。また、実習指導者から、学生間の検討内容や思考についてのフィードバック、さらには実習施設の倫理的な実践に向けた取り組みの紹介や、倫理的実践のために必要とされる看護職のアセスメント力についての助言を得た。このような実習指導者の助言から、倫理的課題の解決に向けて看護職が実際にどのように判断し行動しているかを具体的に知ることができた。また、日々、高齢者とかかわっている実習指導者の助言は、倫理に適った実践に向け、チームの中で看護職に求められる役割の理解を学生に促していた。

2）高齢者ケア施設において疾病や障害をもちながら療養生活を送る対象者を包括的に理解し、対象者とその家族に必要な支援をアセスメントする能力を修得する

2020 年度前期以降実施してきた学内実習とオンライン実習が中心のプログラムにおいても、学生は視聴覚教材を活用した学習から、認知症当事者やその家族の思いや葛藤の理解を深めることができていた。そのような学習方法に加え、今期の実習プログラムで実施した、施設に入居する高齢者とオンライン上でのかかわりができたことで、高齢者の人生や現在の生活の語り、高齢者の生活の実際を見聞きできていた。学生は、そのような経験により、疾病や障害とともに生きる高齢者の思いの理解をさらに深め、高齢者の生活の場において看護職に求められることの考察は具体的なものとなっていた。看護過程の展開は紙上の事例を用いたものであっても、実際に高齢者とかかわった経験が、アセスメントの視野を拡大させ、一般的な看護計画に留まらない個別性のある具体的な計画に修正されることに繋がっていた。

臨地実習で受け持ち高齢者への実践ができた実習グループにおいては、従来の 2 週間の臨地実習のなかでは確保していなかった自己学習の時間をうまく活用し、文献や書籍を調べながら根拠のあるケア計画の立案を丁寧に行い、実習指導者をはじめとした施設の職員に助言を得ながら、主体的な実践と実践の評価ができていた学生が複数いた。加えて、実習の中間時点に学内日を設けたことで、自分の思考の整理や自己の課題の明確化や翌週からの具体的な看護実践計画の立案ができたと考えられる。臨地での実習体験は貴重な時間である。しかしながら、臨地実習時間を長時間確保できていることのみが効果的な学習方法とはいえないことが、今期の実習から明らかとなった。今後も、学生が思考を整理しながら根拠をもった実践ができるように実習スケジュールや方法を工夫・検討していく必要があると考える。

3）療養生活を送る対象者と家族の価値観や意思決定を尊重し、人生の統合を支える看護を実践する

今期の実習においては、実習指導者と相談しながら学生が出来る限り施設に入居する高齢者とかかわることができるように様々なプログラムを設定し実習を展開してきた。オンライン上であっても、高齢者の語りを聴くことのできたグループは、高齢者の生活史や過去の経験から培われた価値観を捉えることの大切さの理解がさらに深まり、紙上事例の看護過程の展開にも活かすことができていた。また、臨地で実際に高齢者とかかわることができたグループは、施設で老いとともに生きる高齢者の心情の理解を深めることができていた。そして、どのような日常生活援助が必要なのかを考え、具体的に計画を立案し実践しようとすることができていた。しかしながら、生活の場である高齢者施設に入居する高齢者の生活リズムやその時の高齢者の意思によっては、限られた臨地実習期間中に実施した看護を評価・修正し再度実施するプロセスを十分に踏むことが困難であった学生もいた。

したがって、学生が高齢者の生の声と、他の学生の意見、実習指導者や職員の助言を得て、視野を広げながら具体的な実践方法を考えられるような工夫を行い指導していく必要がある。加えて、高齢者ケア施設に入居する高齢者への看護実践において、実習期間中に、看護計画の実施・評価のプロセスを繰り返すことができる看護計画の内容の指導や臨地実習日の設定を行うなどの検討する必要がある。

4）対象者の支援にかかわる他職種との連携・協働の実際、継続看護の視点を学び、そのあり方と看護の役割を理解し、今後の課題について考察する

従来の 2 週間の臨地実習では、サービス担当者会議やケア会議、入居前の入居判定会議など多職種が協議する場に学生は参加し、他職種の役割や専門性の違い、他職種との連携・協働において看護職に求められる役割を学んでいた。2021 年度後期は、いずれの実習プログラムにおいても、学生がこのような多職種が協議する場に参

加することは困難であった。しかしながら、短期間であっても、臨地実習で看護職と介護職、作業療法士などとの情報共有や相談・報告の場面に参加できたことやオンラインもしくは対面でのカンファレンスの実習指導者の助言から、多職種が集まるケアチームの中で看護職がどのように他職種と連携し、役割を果たす必要があるのかを考えることができていた。しかし、臨地実習ができたグループとできていないグループの差異にかかわらず、いずれの学生ともに継続看護についての学びは深まりにくい傾向にあった。したがって、紙上事例であっても、高齢者を受け持った場合であっても、今後の生活を見据えることができるような教育的な支援がより必要であったと考える。目の前の対象者に、今後どのようなことが予測されるのかを学生が実習の早期から想像し、継続的な視点をもって看護過程の展開に取り組めるように働きかけるなど、指導方法を検討していく必要がある。

5）療養生活を送る対象者と援助関係を築くとともに、援助者としての自己の課題を明確にする

臨地実習で高齢者とかかわることのできた学生は、高齢者が他者の援助を受けて生活するなかで感じている思いや希望、実際のケア場面を見学できていた。それにより、援助者が高齢者の生活に与える影響の大きさを感じ、援助者として必要な姿勢や力を考えることができていた。加えて、短期間の臨地実習で実際にケアの提供ができた学生は、自分の援助に対する高齢者の反応から、自らの援助を振り返り援助者としての自己の課題を整理することができていた。また、オンライン実習中心で高齢者と直接かかわることのできなかった学生においても、オンラインでの高齢者とのかかわりや認知症当事者や施設に入居する高齢者についての視聴覚教材の学びから、援助者が高齢者と家族にとってどのような存在であるべきかを考えることができていた。いずれの学生においても、今回の実習で援助者として自分のできたことと未経験なこと、課題として残ったことを整理し、今後の実習に活かしていきたいと考えている場合が多かった。このように学生が自らの援助者としての課題を整理できたのは、実際に高齢者と臨地実習で直接かかわること、もしくはオンライン上であっても高齢者とかかわることができたためと考えられた。これは、コロナ禍 1 年目の老年看護学実習の課題であった「学生自身が高齢者とかかわることを通して高齢者の反応や手ごたえを知る」ことを達成したものと考えられ、コロナ禍 2 年目において、その時期に実施可能な様々な実習プログラムを展開したことに意義があったと推察する。今後、どのような実習プログラム、実習方法であっても、学生が領域別実習において、横断的に学習の積み重ねができるように、当該実習での自己の経験の振り返りを促し、自らの課題を整理できるような指導を行っていくことが重要と考える。

Ⅳ．今回の新たな実習方法の取り組みを通した今後の実習に向けた課題

1．大学側と実習施設側の状況の共有と方針の明確化

COVID-19 感染拡大の影響を受け、特に老年看護学分野では臨地実習を中止した大学が多い（日本大学協議会 , 2020）。このような学士課程において養われる看護実践能力の質的水準の保証という課題に直面するなかで、各大学は、臨地実習の時期や施設の変更、日数や時間の調整、教育方法の変更、学生の感染防止対策等の様々な工夫や調整を講じ、実習施設からも協力を得られることで、必要な教育を継続させてきたことが報告されている（日本大学協議会 , 2020）。本分野における 2021 年度の老年看護学実習においても、各時期の感染拡大状況を鑑み、適宜、実習施設の管理者や実習指導者と相談・調整し、そのとき可能な方法で実習プログラムを設定し、実習を展開してきた。学生ができるだけ臨床の現実に近いリアルな体験ができるように、実習施設の実習指導者をはじめとした多くの職員の協力を得ながら、教員が撮影した施設の動画視聴や施設の見学実習、オンラインによる高齢者とのかかわり、臨地実習日数を短縮し高齢者を受け持つ実習を状況に合わせて実施した。加えて、実習指導者によるオンラインでの講話やカンファレンス参加などの方法を実習プログラムに組み込んだ。このように、高齢者を受け持つ実習の期間は短縮されても、施設に入居する高齢者を取り巻く状況を俯瞰して学習できる方法で実習ができたことが、学生の具体的な学びを得ることに繋がったと考える。また、施設に入居する高齢者とかかわる機会を工夫してもつことで、オンライン実習が中心となった 2020 年度の実習の課題であった、学生自らが高齢者にかかわることを通して高齢者の反応や手ごたえを知ることが達成できたと考えている。COVID-19 感染拡大という、医療提供体制の逼迫した状況のなかでも、実習施設から多くの協力を得られたこ

とは、本科目の目的と目標、そして、看護学生という後世を育て輩出するという看護職としての責務と使命を果たしているためと考える。また、大学側と各実習施設側の互いの立場や状況を踏まえ、臨地実習実施に向けた課題と方針の明確化、実習施設としてできることとできないことの整理ができていたことも影響している。今後も、大学側と実習施設側の状況を踏まえ今後の方向性と方針の共有を行い、高齢者の安全を第一に考えながらも、教育の質を担保するための方法を大学と実習施設が連携し検討していくことが必要である。

２．学生の臨地実習に対する心身の状態を踏まえた実習スケジュールや方法の検討

2021 年度後期に展開した複数の実習方法を組み合わせた実習プログラムには、学生にとって一定の教育効果があったと評価する。学生にとって緊張度の高い臨地で高齢者を受け持つ実習から離れ、見学実習や施設の動画視聴などにより学習することで、学生は高齢者施設で起こる現象を俯瞰して捉え、広い視野をもって看護の対象である高齢者を取り巻く全体を見渡すことができていた。このことにより、学生自身ではなく、ケアを受ける対象である高齢者の立場から、対象者本人にとって何が善いのかを純粋に考え、思考を整理することが可能になっていた。学生は、臨地実習において新たな環境への適応が必要になるが、看護学生の実習時の心身の負担に関する研究では、臨地実習中よりも臨地実習前の不安が高いこと、実習そのものへの不安と実習中の実習指導者や実習施設職員、教員などとの人間関係に関する不安が高いことが示されている（重岡 , 2016; 藤澤 2017）。これらの報告を踏まえ、臨地実習前の導入として、客観的な立場から施設を理解し当事者の目線から何が善いかを純粋に考えられる学習の機会を確保することは、臨地実習前の学生の心身の状態に馴染む学習方法であったといえる。

2021 年度後期はその時の感染状況等を踏まえ、実施可能な実習方法を複数組み合わせて実習プログラムを構築し実施してきた。今回の実習プログラムを経験した学生からは、高齢者施設で暮らす高齢者の体験や思いの理解が深まり、必要とされる具体的な看護の検討と実践に役立ったとの実習後の評価が得られた。しかしながら、学生は複数の高齢者施設の実習指導者と短期間で関係を築かなければならないことに対し、少なからず不安や緊張感をもっていた。したがって、学生が複数の実習指導者とスムーズに関係性を築くための配慮について今後は検討し対応する必要がある。

本実習で実施したオンラインによる高齢者とのかかわりでは、生活史と現在の生活に焦点を当て高齢者に語ってもらったことで、高齢者のリアルな思いに触れ、その人の価値観を具体的に考察したうえで、今後もその人らしく過ごすために求められる看護を検討することに繋がっていた。臨地実習日数を短縮し高齢者を受け持つ実習では、従来の臨地実習と比較すると高齢者とかかわる時間は短くなるが、限られた時間であるからこそ自らのかかわりやケアの実践を丁寧に振り返り、より具体的な看護計画の立案とケアの実践に繋げることができていた。また、今期に展開したいずれの実習プログラムにおいても、学内日やオンライン日などに自己学習の時間があることで、授業の復習や文献検索ツールを活用した学習に熱心に取り組み、高齢者のアセスメントや看護計画に反映させることができていた。したがって、COVID-19 の感染拡大状況を踏まえ、できる限り臨地で高齢者を受け持つ実習の実施に向けた調整を行いながらも、より教育効果の高い実習展開に向け、臨地から離れて学ぶ機会も確保するなど、臨地での学びと学内での学びを統合するための思考を深める機会を十分に確保する実習方法とスケジュールを検討していく必要がある。また、視聴覚教材による学習は、領域別実習前の下位学年での学習においても取り入れているものであり、本来であれば実習前の既習学習として修得しておける内容である。しかしながら、3 年次の領域別実習において 1 人の援助者としての自覚が高く、より学習意欲の高い時期に学習することで、看護実践能力の修得により効果的な学習になったと考える。よって、老年看護学の授業展開および老年看護学実習での学習内容のすみわけや学習の積み重ねができるような授業と実習の展開方法について今後も検討していくことが必要である。

３．高齢者施設に入居する高齢者にとって学生とかかわることの意義

コロナ禍において施設で生活する高齢者については、長期化する自粛生活による認知機能低下の悪化、身体活動量の低下、認知症の行動心理症状の悪化など、心身の機能への影響が報告されている（伊井 , 2021; 飯島 2021）。2021 年度後期に協力を得た実習施設においても、

面会は原則オンライン面会、クラブ活動やイベントの中止や縮小、地域のボランティアの出入りの制限などから、高齢者は日々の変化や楽しみを見出しにくい日常を送っている場合も少なくない。今期の実習で受け持たせていただいた高齢者のなかには、臥床時間が長くなっている方や筋力低下や認知機能の低下が進んでいる方もいた。そのようななかで、学生が高齢者と短期間であっても直接ケアを実践できたことやオンラインでかかわりをもてたことは、学生のみならず、高齢者にもよい影響を及ぼしたと考える。オンラインにより実習協力を得た高齢者に学生の学びを報告した際には、本人から、「自分の人生を若い人に話せたことで、改めて自分のことを考える機会となった。若い人に話せたことに感謝している。自分にできることがあったらまた頼んでほしい」と話された。この高齢者の言葉から、実習での学生とのかかわりは、施設に入居する高齢者にとって、その人らしい生活を送ることにも繋がっていると考えられた。したがって、COVID-19 感染拡大下であっても、学習方法を工夫し、学生が施設に入居する高齢者とかかわりケアを実践することは、老年看護を学ぶ学生にとっても、長引く自粛生活を施設で送る高齢者にとっても有益であったと推察する。

まとめ

長期化するコロナ禍において実施した 2021 年度後期の老年看護学実習は、感染拡大状況や施設内の状況に応じて、その時期に可能な方法で実習プログラムを展開した。この実習プログラムは、学生自らが、高齢者とかかわることを通して高齢者の反応を知るとともに、必要とされる看護を検討するために効果的であった。一方で、どのような状況下の実習においても、大学側と実習施設側の状況や方針を共有し、学生の教育の質の担保と高齢者の安全性を確保した実習方法を検討すること、学生の実習に対する心理状態に応じた実習スケジュールや方法が必要とされることなどが今後の課題として明らかとなった。

COVID-19 の感染拡大の収束には、未だ時間を要することが予測される。今後、どのように実習を展開するかにあたっては、学生と施設に入居する高齢者の双方にとってよい効果を得られる実習方法を検討し、状況に見合ったより効果的な実習展開を実施していくことが重要である。

謝辞

実習にご協力してくださった高齢者の皆様、実習指導者様をはじめとした看護職、介護職の皆様には、このような状況のなか、本実習に多大なご協力・ご配慮いただけたことに深く感謝申し上げます。

本報告において、申告すべき COI はありません。

文献

藤澤美穂 , 氏家真梨子 , 畠山秀樹 , 他 . (2018). 看護系学部の臨床実習における学生のストレス . 岩手医科大学教養教育研究年報 , (53), 39-50.

伊井裕一郎 , 冨本秀和 .(2021). COVID–19 と認知症診療 . 神経治療学 , 38(1), 24-27.

飯島勝矢 . (2021). フレイル検診 COVID-19 流行の影響と対策 . 日本老年医学会雑誌 , 58(2), 228-234.

神戸市看護大学 . (2020). 新型コロナウイルス感染症に対応した看護学実習ガイドライン . 検索年月日 2022 年 6 月 5 日 , https://www.kobe-ccn.ac.jp/archives/pdf/current_student/covid_guideline03.pdf.

忽那賢志 .(2021). 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19). 日本老年医学会雑誌 , 58(1), 65-69.

文部科学省 , 厚生労働省 . 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師養成所における臨地実習等の取り扱いについて , 検索年月日 2022 年 3 月 25,https://hsu.ac/wp/wp-content/uploads/2020/06/d1e1e98735174dc636a8ba9a1f0e5f6a.pdf.

日本看護系大学協議会 . 2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査結果（科目別）調査 B, 検索年月日 2022 年 3 月 25 日 . https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19_surveyBreport.pdf.

重岡秀子 , 池本かづみ . (2016). 成人看護学実前後における学生が感じるストレス感情と不安状態の実態 . 広島都市学園大学雑誌 : 健康科学と人間形成 , 2(1), 17, 26.

坪井桂子 , 秋定真有 , 石橋信江 , 西村康子 . (2020). オンラインの特性を活かした老年看護学実習 , 看護教育 . 61(10), 940-947.